

32、人名

32-1 ケネー、フランソア (1694-1774)

「フランスの経済学者、医師、重農主義学説の創設者。彼の『経済表』は——しかも「経済学の幼年期である18世紀の3分の2の時期においては——最高の天才的な着想であり、いままで経済学はそのお陰をこうむってきたのである」(マルクス)。(大月版『資本論』③付録P15)

32-2 ステュアート、サー・ジェームス・デナム (1712-1780)

「イギリスの経済学者、重商主義の最後の代表者のひとり。貨幣数量説の反対者。」
(大月版『資本論』③付録P16)

32-3 スミス、アダム Smith, Adam (1723-1790)

「リカード以前の最も重要なイギリスの経済学者。資本主義的マニュファクチュア期と初期工場制度との経験を一般化し、古典派ブルジョア経済学に発展した態容を与えた。」
(大月版『資本論』③付録P16)

32-4 ランゲ、シモン・ニコラ・アンリ (1736-1794)

「フランスの弁護士、政論家、歴史家、経済学者、重農主義の反対論者。ブルジョア的自由と資本主義的所有関係とを批判的に分析した。」(大月版『資本論』③付録P19)

32-5 マルサス、トマス・ロバート (1766-1834)

「イギリスの聖職者、経済学者。ブルジョア化した土地貴族のイデオログ。資本主義の弁護論者。資本主義のもとでの勤労者の貧困の正当化を目的とする反動的な過剰人口理論をあみだした。」(大月版『資本論』③付録P18)

32-6 セー、ジャン・バティスト (1767-1832)

「フランスの経済学者。アダム・スミスの著作を体系化し俗流化した。土地、資本および労働を地代、利潤および労賃の自立的源泉と称することによって、俗流経済学的生産要素説を基礎づけた(三位一体的定式)。」(大月版『資本論』③付録P16)

32-7 オーエン、ロバート Owen Robert(1771-1858)

「イギリスのユートピア社会主義者。資本家としては彼の階級を脱け出し、労働者階級の味方になった。」(大月版『資本論』③付録P14)

32-8 リカード、デーヴィット Ricardo, David (1772-1823)

「イギリスの経済学者。彼の著作は古典派ブルジョア経済学の頂点をなした。」
(大月版『資本論』③付録P19)

32-9 ミル、ジェームズ (1773-1836)

「イギリスの経済学者、哲学者。リカードの学説を俗流化した。」
(大月版『資本論』③付録P18)

32-10 シスモンディ、ジャン-シャルル-レオナルド・シモンド・ド (1773-1842)

「スイスの経済学者、歴史家、古典派ブルジョア経済学の終わりに登場し、小ブルジョアの経済学を基礎づけた。「小ブルジョアの立場から」(レーニン)資本主義を批判し、小生産を理想化した。」(大月版『資本論』③付録P15)

32-11 ミュラー、アダム・ハインリヒ、ニッタードルフ士爵 (1779-1829)

「ドイツの政論家、経済学者。封建的貴族階級の利益におうじた。いわゆるロマン派経済学の代表者。アダム・スミスの学説の反対者。」(大月版『資本論』③付録P18)

32-12 リスト、フリードリヒ (1789-1846)

「19世紀前半のドイツ市民階級の最も進歩的な経済学者。資本主義体制の内的関連の理論的把握にたいしては無力であったにせよ、彼は「実践的悟性」(マルクス)として多面的な方法でドイツへの産業資本主義の貫徹を促進した。ドイツの関税同盟および全ドイツ鉄道制度創設のための彼の積極的擁護は、国民的統一の準備のための闘争で重要な役割を演じた。ドイツ産業ブルジョアジーの保護関税派の権威として彼は、エンゲルスが評したように「依然として、ドイツのブルジョア経済学文献が生みだした最善のもの」を創造した。」
(大月版『資本論』③付録P19-20)

32-13 ミル、ジョン・ステュアート Mill, John Stuart (1806-1873)

「イギリスの経済学者、実証主義哲学者。リカード学説を俗流化し、ブルジョアジーの利潤利害と労働者階級の生活利害とのあいだの調和を説き、資本主義の矛盾を分配関係の改良によって克服しようとした。ジェームズ・ミルの息子。」(大月版『資本論』③付録P18-19)

32-14 プルドン、ピエール-ジョゼフ (1809-1865)

「フランスの政論家、社会学者、政治学者、小ブルジョア階級のイデオログ。無政府主義の理論的創始者のひとり。」(大月版『資本論』③付録P17)

32-15 ラサール、フェルディナント (1825-1864)

「ドイツの文筆家、小ブルジョアの扇動家。マルクス主義の理論と実践、とくに階級闘争、社会主義革命およびプロレタリア独裁の敵。1863年のドイツ労働総同盟の創立に重要な役割を演じた。しかし、ラサールの目標の設定とイデオロギーとは労働者階級をその主要な課題からそらせた。彼はビスマルクと取引して、その「上からの」ドイツ統一政策を支持した。」(大月版『資本論』③付録P19)

32-16 ベルンシュタイン、エドゥアルト (1850-1932)

「ドイツ社会民主党および第2インターナショナルのなかの日和見主義の指導的主張者。党

機関紙『デル・ゾチアールデモクラート』の編集者(1881-1890年)。ベルンシュタインはドイツにおける修正主義の理論的頭目であった。彼は階級闘争、プロレタリア革命、プロレタリアートの独裁ならびに労働者の階級的同盟に関するマルクス主義学説を否定し、これにたいして現存のブルジョア社会の枠内での改革によって平和的に社会主義へ成長できるという誤った理論を対立させた。」(大月版『資本論』③付録P17-18)

32-17 カウツキー、カール Kautsky, karl (1854-1938)

「ドイツ社会民主党および第2インタナショナルの理論家。党の理論機関誌『ディー・ノイエ・ツァイト』の編集者(1883-1917)。彼の活動の初期には彼はマルクス主義者であった。90年代までは彼はマルクス主義の普及に貢献した。それにつづく時期には彼は日和見主義の最も危険な変種である中央主義の代弁者となり、マルクス主義からその革命的内容を奪おうとした。第一次大戦中、彼はマルクス主義を完全に裏切り、公然たる修正主義の主要な主張者のひとりとなり、1917年以降ソヴェト政権および革命的労働者運動の最も激しいてきとなった。」(大月版『資本論』③付録P14)